

博多の海の暗黙知・唐房の消長と在日宋人のアイデンティティ

服部, 英雄
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授 : 日本史

<https://doi.org/10.15017/21715>

出版情報 : 内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラム : 九州大学21世紀COEプログラム(人文科学)「東アジアと日本:交流と変容」, pp.171-197, 2006-02-20. 九州大学21世紀COEプログラム(人文科学)
バージョン :
権利関係 :

博多の海の暗黙知・唐房の消長と在日宋人のアイデンティティ

服部 英雄

本報告は、本 21 C・COE プログラム全体のキーワードのひとつ、「暗黙知」概念を導入とし、博多の海および東シナ海交通の再検討を行うなかで、在日宋人のアイデンティティをさぐるものである。

1. 博多の海と東シナ海・航海技術の再検討

「暗黙知」the tacit dimension は主観的・身体的な知・創発知・潜在知をさすという。現段階での説明は容易ではない。今回のワークショップでは広義に拡張、経験知・非文字知・未記録知から、「暗黙知」の前提である知識の多様性をさぐる。「暗黙知」は個の知かもしれないが、集団の知のなかで生まれるし、共有もされる。民衆知でもあろう。文字・書物によらない知の体系である。

文献資料に依存する歴史学がもっとも不得手な分野が非文字世界、暗黙知・経験知の世界である。前近代人・中世人の多くは文盲 illiteracy であって、その行動の大半が経験知（非文字知）によっていた。文字による情報提供は少量に過ぎず、識字層であっても実際の日常行動には、非文字知による行動をとった。そうしたことからすれば、真の前近代社会を知るために、「暗黙知」（経験知・民衆知）の世界、知の体系を追跡することは、歴史学には必要な作業である。この概念を導入することによって、有効な理解が可能となる事象も多い。

風

春、遣明船（16 世紀）が志賀島 Shika-no-shima からほぼ真西に当たる的山大島 Aduchi Ohshima に向かう場合、北東の風に出帆した。本来の順風である東風は、移動性高気圧がすでに通過した風であり、悪天の予兆である。持続が約束された好天は準順風（半順風）である北東の風だった。経験知であり、暗黙知である。この場合、真帆 maho ではなく片帆 kataho で進む。

真帆は追風 fair wind を受け、片帆は横風 crosswind を受ける。片帆は「ほを

ゆがめてひくをば、かたほ kataho といへる也』『名語記』、また「大潮や淡路の瀬戸の吹きわけにのぼりくだりのかたほかくらん」（大江匡房 Oue Masahusa・堀川百首、平安時代）と古代中世の史料に見える。片帆はごく一般的な技術で、帆固定時の船の動きによる経験知であろう。遣隋使船以来の渡唐船も、帆の操作（片帆）によって風向きとは異なる方向に船の針路をコントロールできた。



荒木船（『日本の船』より）

瀬 Se

明治期（19世紀）の博多湾海図 chart（明治三十七年・1904，海軍水路部作成）を見ると，博多港入口に地の瀬 Jinose・間の瀬 Manose・中の瀬 Nakanose などの瀬（se, 暗礁 rock hidden in the surface of the water）があったことがわかる。どの港にもこうした暗礁があって，危険地帯であった。これが昭和六年（1931）の海図の段階になると，瀬はみな防波堤の基礎になっている。瀬は天然の防波堤であったし，そこを人工防波堤にすることによって，暗礁の危険も回避できた（176～177頁図参照）。

今津湾内にも，広い海のまっただ中に，人が立つことのできる場所がある。雲瀬 Kumoze という瀬である。瀬，つまり水面下に隠れる暗礁で，大潮干潮時の水深は海図によれば 0.8メートルと記されている（実際にはわずかに頭が出ることもあるらしい）。長垂山から島の方向へ，海の底にも山脈がのびていて，その頂上になるのだろう。その横に四百メートル離れて，もう一つ，常空庵瀬という瀬の名前も書かれており，こちらは水深 1.8メートルとある。瀬は航海者にとっては障害である。危険地点として海図に書き込まれる。時化のときが特に危ない。反面，瀬は魚が集まる絶好の漁場であった。海の生活者なら周知していなければならない。

瀬の呼び名は港々によって，つまり漁協ごとにちがっている。今津漁協で聞いてみたが，常空庵 Jyokuu-an はジョウコバン Jyokoban，海図の「地の居亀」，「沖の居亀 Origame」は今津ではオリガミ Origami という。今津漁港の管内にはほかに女瀬 Meze，大瀬 Uze，縄瀬 Nouze，甌瀬 koshikize，もやい瀬などがあり，能古島との間には象瀬 Zoushi，御山だしなどがある。瀬は経験知であるからふつうは文字化されない。しかし偶然に文字化されることもある。『福岡県史・近世史料・浦方文書』（252頁）に，「天正四年」（1576）の年紀があって，寛文九年（1669）に写されたという箱崎・奈多両浦の相論文書があり，そこに内海（uchi-umi 博多湾と今津湾）の瀬が多数書かれている。

内海瀬数目録之事

(箱崎 Hakozaki 津の主張のうち)

箱崎前にハ 黒たう (ゑたうカ) 叶松 築地鼻
今名嶋前 島居耳 (島居前カ) 大高洲 大隈出し わうこ洲 小浜前
名嶋ニハ まないた瀬 宇瀬 結松 口瀬 草葉 (*草越) 竹崎
香椎前ニ おんしやく瀬 堂前 深山瀬 三嶋 ふかの瀬 むくしろ かたをそ
くる瀬 鬼かしら 女四郎 (*女ゆゑし)
奈多前ニハ 大はち 小はち 大高洲 大すま 丸洲 鯖のすま かいこの崎
そたう崎 つみきり 青草 いけ原 (*いけ草) すないけ 水志利 塩屋の小路
北浦 もなか 西戸 中西戸 ちかも 丈口 (*犬口)
博多前ニハ 荒戸 うく嶋 渚瀬 うら山まハシ 御崎出し
姪浜ハ 岩瀬
野古嶋前ニハ 亀瀬 つの瀬 くも瀬 そうし (*御ろし) かちめ瀬
瀬戸あい (*瀬のあい)
今津前ニハ め瀬 今瀬
泊前には ^(瀬)なう瀬 大瀬
ひろのまへにハ 赤瀬 武蔵出し 中間 ふみきり
志賀前ニハ もり^(くか)出し かなの浜 といの瀬 さうし出し 横あて
いぬこ 中瀬 せとの瀬 むさし出し 小中瀬 ^(瀬)は嶋

(*は別本・楡垣文庫本の読み)

「野古嶋前」に「くも瀬」は登場しているが、常空庵瀬はない。近世初頭にその名がなかったとすれば、後の命名となろうか。新地名「常空庵」瀬は、なにか難破事件を思わせるような地名だ。また現在の今津では「天正」にあった「今瀬」は記憶されていない。

湾内最大の箱崎浦は「箱崎 (Hakozaki) 宮の神慮」により二季祭神役に鯛やミカキ、生海鼠 (Nama-namako)、八朔に荒巻、八月十五日に海老、蛸、ガザミほか四季折々に海のものの献上を勤めてきていると主張している。「天正」相論文書では、神威に加え、こうした瀬を多数知ることが、他に異なる優越性、内海の「潮の満ち干を限り進退する」根拠であると主張された。浜先だけの漁村ではなく、遠く内海の浦々にも出て、利権を持つ港津だったと強調したのである。

*この史料が真に天正四年のものであるのかは検討を要するが、「小原遠江守・代」とある。実在した人物の時代が語られており、おおむね天正頃の様相を語るものとする。

なお博多前に荒戸、鷗来島（西公園北西沖）があって、当時の博多は那珂川河口以西を含んでいたことがわかる。『蒙古合戦（竹崎季長）絵詞』にも「賊徒博多に攻め入り候」とあるが、じっさいはその「博多」は赤坂を指していた。

経験知・非文字知がはじめて文字化された。しかし瀬の名前を知るだけでは真の実用知識とはいえない。当時正確な地図はない。広い海のまっただ中で、瀬の位置を正しく認識する必要がある。それは陸上の地点二箇所以上と、船との見通し位置から、瀬の場所を確定する方法である。これを山見といった。それら山見の詳細は文字化も地図化もされず、あくまで経験知・非文字知のままだった。漁民であればだれでも知る知識を、文字化し記録する必要は特にはなかった。

水深

明治期海図でも、博多湾内は意外に浅く、港湾入り口・間の瀬あたりでは二尋（2fathoms, 3.6メートル）程度の水深しかない。能古島 Noko-no-shima 東方つまり博多湾の過半は水深三尋（5.4メートル）程度であった。『老松堂日本行録』の朝鮮通信使宋希環は目的地が淀川河口そして京都であったから、博多に寄る必要はもともとなかった。船を志賀島に碇泊させたままで、博多までは小艇（舳 hashike・端艇、平田船 hiratabune、ダンベ船かもしれない）に乗り換えて往復した。おそらく背景には、大型船舶にとっての博多入港が困難を伴うものだという事情があった。

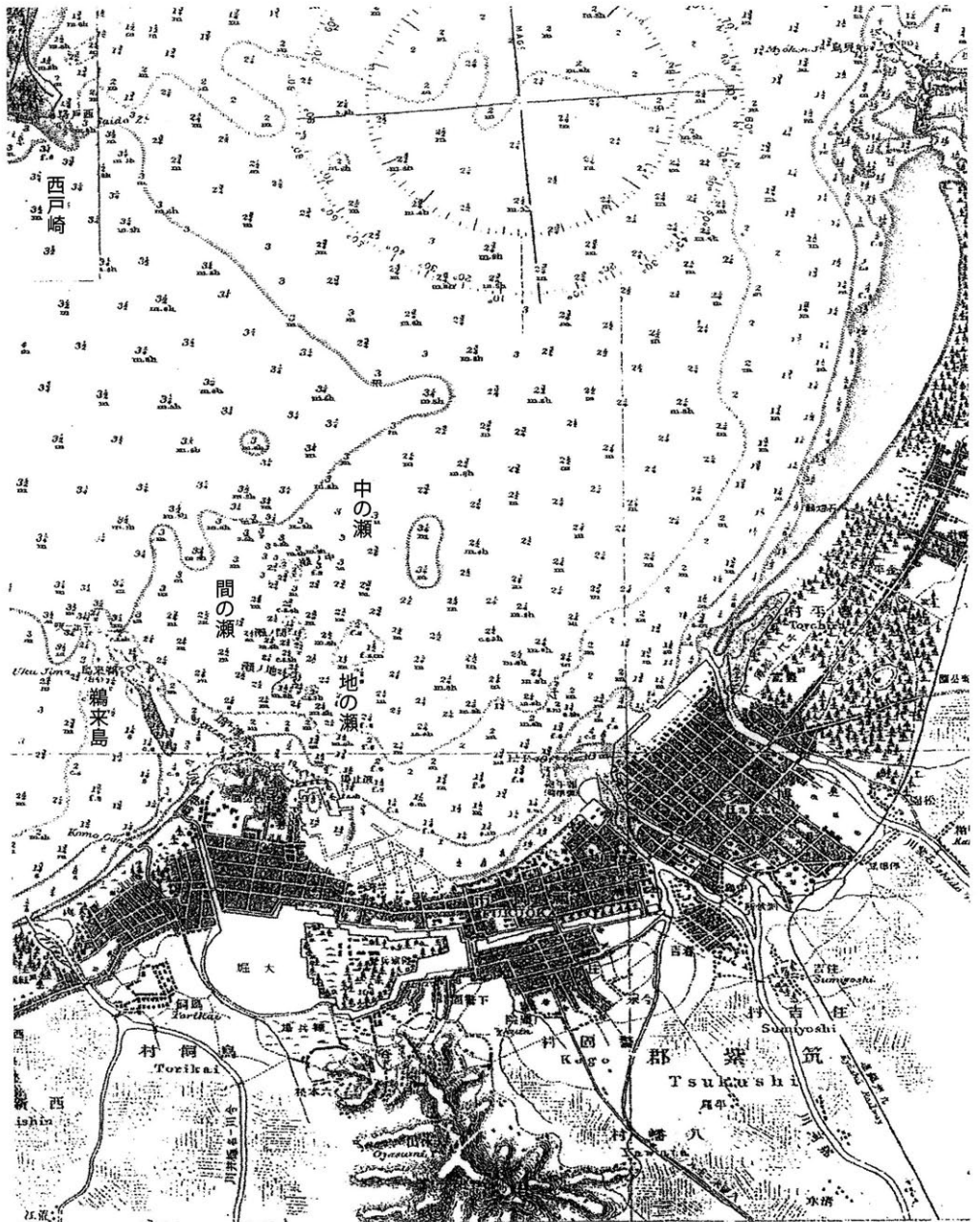
渡宋船も遣明船も常時、鉛直線 a vertical line で水深を測っている。

『策彦入明記』嘉靖十八年・天文八年（1539）にみる策彦入明の際は

八〇尋（四月二五日）→六三尋（四月二九日）→四三尋（五月一日早旦）
→三七尋（同日午後）→一六尋（二日）

と多いときは一日に二回計測して、大陸への接近を確認している。

『策彦入明記』嘉靖二十年・天文十年（1541）七月の帰途の際は、葦屋を過



明治37年海図



昭和6年海図

ぎて宮浦につくと、計測を行っている。

海水浅了，而下水長糸，或三尋，或四尋
とあるから、三尋、四尋は浅いという意識があった。

成尋の『參天台五臺山記』（1072～）でも、

昨日未時入唐海了，以繩結鉛入海底時，日本海深五十尋，底有石砂，唐海三十尋，底無石有沼，右昨日量了者と，結鉛（鉛直線）を投じている。

加藤清正軍船は350人に乗せ、船艙（舟倉）深は5.9メートルだった（山形欣哉『歴史の海を走る・中国造船技術の航跡』2004・農山漁村文化協会）。水深が三尋（3 fathoms, 5.4メートル）より浅い海には、こうした巨大船舶の入海は困難だった。清正軍船らが入湾できなかつたから、博多の海ではなく、深い呼子の海が豊臣秀吉の朝鮮出撃基地に選ばれたのである。

*現在の博多湾・人工航路は浚渫によって14メートルの水深がある。参考までに、浅いといわれ、飛行機からの魚雷攻撃が困難とされていた真珠湾の水深は12メートルである。

大型船の曳航

近世の那覇港における進貢船（滋賀大学経済学部史料館蔵「琉球貿易図屏風」）、長崎港におけるロシア船（九州国立博物館蔵「ロシア船長崎出航の図（亜魯西亜船湊下図）」）、鹿児島港における琉球中城王子上国の船（尚古集成館蔵）など、大型船と港を描いた絵画が多く残る。それらをみると大型船は湾内では帆を下ろし、多数のはしけ（舢・端艇）につながれて曳航されている。ロシア船の場合には160艘で曳航した（『黒田家譜』）。外国船という特殊事情があったのかもしれない。しかし小回りのきかない大型船は湾内・港湾内で帆を上げて自走することは危険にすぎたともいえる。時代は異なるが、100人以上が乗船した遣唐使船・渡唐船の場合も、大なり小なりこうした課題を持ち合わせていたと推測したい。

以上に見た風（気象）、潮流、瀬（暗礁）、水深など航海技術に影響を与える知の体系があった。その熟知、共有・組織的な航行・地域との連携があらゆる航海に必要で、不可欠とされていた。

港湾築造

博多の港は浅い海という弱点を克服しようとした。船江の浚渫のいっぽう、置石や浚渫土による人工島・埠頭の建設を積極的に行った。

『策彦入明記』天文八年（嘉靖十八年・1539）正月二十八日条に

齋后、俾當津編戸明掘船江、大光・東禪・吉治及予往而觀之とあって、掘削と船江の建設が行われていたことがわかる。

こうした工事は摂津 Settsu 国・兵庫津 Hyougo-tsu での修築工事に類似する。はやく平清盛 Taira-no-Kiyomori は承安三年（1173）には経島 Kyou-no-shima を築き、治承四年（1180）には諸国雑物運上船の梶取水主 kandori/kako に夫役を命じて石椋 ishikura を修造させている。室町期になると、永享五年（1433）七月に「兵庫砂掘人足」（多田神社文書）とある。永享五～八年（1433～36）東大寺文書には「兵庫北関・嶋修固、置石代官職」「船にてとり候いし」などがある。現物の残骸が残る鎌倉 Kamakura・和賀江島 Wakaejima（国指定史跡 national historical monument）にも明らかだが、石積みによる埠頭建設、併行する浚渫土（砂掘）による埋立工事は、中世以来近代に至るまでの港湾築造の基本スタイルであった。むろん機械力や浚渫船 dredger の導入は近代のことで、機械力の導入は明治三年（1870）の神戸港、安治川河口、浚渫船の普及は大正期とされる（長尾義三「浚渫」による）。

中世の海底掘削は、あくまで大潮干潮時のわずかな時間帯に、土嚢などによる潮止めを利用してしか行い得なかった。

2. 島 Shima・津泊 Tsu-tomari の重要性

このように港湾内部に航行上の制約・困難があったから、港湾外の役割が重要であった。その第一は島 shima である。

島

(1) 志賀島 Shika-no-Shima

志賀島は「長講堂」領すなわち天皇家領荘園であった（島田文書）。年貢公事は長講堂つまり寺院に納入された。御厨タイプ、海産物・海の生き物、ニエを献納するタイプとはいえない。この島が持っていた利権はあきらかに海産物

以外にあった。すなわち交易である。万寿四年（1027）八月二十七日の『小右記』に「去年慮外乗入唐船者・志賀社司云々」とある。「志賀社司」自身が唐船 Karabune を経営していた。弘安の役のおり、元軍が志賀島に上陸した様子は「竹崎季長絵詞」に描かれている。

(2) 小呂島 Oron-Shima, Oro-no-Shima

宋人謝国明が小呂島地頭職を有していた事実は著名である（「毛利家手鑑」建長四年（1252）七月十二日関東御教書、『宗像大社文書』建長五年五月三日六波羅書下）。小呂島相論の訴人（原告）は宗像大宮司氏業であった。その主張によれば「社領」小呂島は、「昔より大宮司成敗」であった。被告となったのは、一度目は謝国明子息である。二度目はその母（後家尼）と謝国明遺跡継承者の地位を争った三原（御原）種延である。三原氏は筑後国の郡名である「御原（三原）」を苗字とし、「種」を通字 *touriji* とする。実名に「種」の一字を用いたものは大蔵一族が大宰府官人の家であった。謝国明遺跡を争ったことから、女婿などの縁者であったと推定される。御原郡は大宰府所在の筑前国御笠郡に隣接し、南には筑後川が流れる。刀伊入寇に功績のあった家でもあり、もともと対外意識が強かった。郡内の板井庄（板井郷）は、平安末期の平家方として著名な板井種遠の苗字の地であろう。

謝国明を地頭に補任した人物として、前預所代常村が登場する。宗像社領は承久の乱後、「将軍家御領」となり、預所は三浦泰村であった（石井進「九州諸国における北条氏所領の研究」、『石井進著作集』五）。三浦氏は義村・光村など、「村」を通字とする。常村も一族であろう。

宗像大宮司が、建長になって二度にわたって綱首謝国明（子息）や三原種延を訴えた。その背景には宝治元年（1247）の宝治合戦による三浦一族、および前預所代（三浦）常村の没落がある。宗像大宮司は三浦一族の没落を好機ととらえ、反撃に出たのである。

宗像と壱岐を結ぶ海上線の上に、まさに小呂島が位置する。宗像大宮司が牧司であった高田牧は薬品、青玻璃、唐絹など多くの唐物を京に運んだことで著名である。高田牧は荒馬を壱岐に求め、牧人が派遣されていた（『小右記』寛弘二年（1004）四～五月）。宗像と壱岐は関係が深かった（次項・壱岐参照）。む

ろん壱岐から西方、かなたには大宋国があった。小呂島は鎌倉幕府領である。宗像社領は平氏政権の段階で本家は八条女院、領家は平頼盛、預所は平盛俊（越中前司、平氏有力家人）であり、小呂島ほかは平氏に掌握されていた。幕府は平氏没官領として領家職以下の権益を継承する。鎌倉後期には本家分を含めて得宗領（北条氏嫡流所領）と化していた。志賀島は天皇領であったが、宗像社領であった小呂島・壱岐・大島（宗像郡）・沖の島（同）も、天皇（院）領であるか、幕府領であるか、得宗領であるかして、つねに最高権力者のものだった。

日宋貿易の玄界灘ルートには博多ルート以外に宗像ルートがあった。幕府が宋人綱首である博多の謝国明を地頭に補任したことは、鎌倉幕府（三浦泰村）による宋人把握の一環だが、同時に宗像氏が掌握する小呂島・壱岐ルートにクサビを打ち込んだことを意味していた。

なお三浦泰村が宗像社領と並んで、肥前国神崎庄を有していたこと（『葉黄記』宝治元年八月十七日条以下）も注目されよう。幕府が宗像社領や神崎庄を掌握したことは海外貿易、日宋貿易のシステム、すなわち北の宗像口ルートおよび太宰府南口、有明海ルートを掌握することと同義であった。

(3) 壱岐島 Iki-shima

壱岐島もまた重要であった。香椎B遺跡から「寛治七年」（1093）、また「(壱岐嶋雑掌)」の文字のある木簡を出土した（『香椎B遺跡』福岡市教育委員会、2000）。香椎社は壱岐に所領を有していた。宗像氏もまた壱岐に所領をもち、貞治四年（1365）以前から壱岐国守護職を継続して所持した（佐藤進一『室町幕府守護制度の研究』下）。宗像社は海の神である。壱岐・小呂島の領有に加えて、沖津宮として沖の島も有していた。これら多数の島が鎌倉幕府領となった経緯は既述した。島伝いの航海では島がきわめて重要な役割を持った。

(4) 鷹島 Taka-shima

弘安の役には多数の元船が鷹島に繫留していた。そこで台風によって多くが沈没した。この島は伊万里湾湾口に位置している。博多湾湾口の志賀島・能古島、唐津湾湾口の神集島 Kashiwa-jima にきわめて類似した地理的位置にあった。元

はまず伊万里海岸に上陸する予定であったと考えられる。内海の、気象を含めた知の体系の完全なる取得に到らず、けっきょくは敗北した。

(5) 見島 Mishima

日本海の孤島として知られる萩沖の見島も、交易を志向する戦国大名の支配下にあった。永禄十三年（1570）あるいは天正十四年（1586）の益田文書（346号、75軸）には所領として見島がみえており、朝鮮との交易を積極的に進めた益田氏の所領に組み込まれていた（光成準治「日本中・近世移行期大名領国における社会構造の研究」博士論文）。

(6) 種子島 Tane-ga-shima

鉄砲伝来の島として知られる種子島の場合、実現はしなかったが、大友氏庶子が種子島氏の養子に入ろうとしたことが「種子島家譜」に伝えられている（中島楽章「ポルトガル人の日本初来航と東アジア海域交易」『史淵』142）。

これらの諸事例は島々泊々の重要性と利権の所在を明白に示すものといえよう。島は遠い存在ではなく、交易の玄関口であった。

津泊

島は重要であったが本土沿岸の津泊も重要な意味を持った。まず博多内海（Uchiumi）すなわち博多湾および今津 Imadsu 湾岸には、発達した砂丘後背に多くの干潟があった。日本海岸は砂丘の発達が顕著である。河川の押し出す土砂が海岸に砂丘となって堆積され、河川は出口をふさがれて砂丘後背湿地＝干潟 Higata を形成し、一ヶ所のみから海に出た。干潟から流出する河川を利用して、小艇、舢舨 hashike が内陸に入ることができた。すなわち底が平たく、波には弱い、内陸深くまで入り込むことのできる平底船（平田船 hiratabune）が接岸できる内海・干潟型の港津が多くあった。それは以下に見る砂丘後背湿地・干潟に形成された。

港が海岸ではなく、干潟に形成される事例は多い。たとえば中世荘園絵図で知られる伯耆国東郷庄 Houki-no-kuni, Tougou-no-Sho の場合、現在では別に河口をもつ天神川 Tenjin-gawa は中世には橋津川 Hashidsu-gawa と合流して海に出て

いた。このため後背湿地の水位が高く、東郷池もいまよりは面積が広がった。橋津川に面する橋津 Hashidsu は干潟の縁辺になり、そこに津があったことは中世絵図から読み取りうるし、近世には鳥取藩 Tottori-Han の藩倉が置かれ、今も建物が現存する。

石見 Iwami 国・高津 Takatsu 川は益田 Masuda 川と合流していたと想定される。鎌倉初期から史料に登場する高津は海岸ではなく、2キロほど内陸に位置する。潮位差の大きな干潟ほど、津は内陸に位置していく。九頭竜 Kudsuryu 川河口の越前 Echizen 国・三国 Mikuni 港など海岸に直接港を持たないケースはしばしばあり、いずれも干潟のケースであった。

当時の航海技術は脆弱であったと考えられる。船は木材を接合したものである。木桶の原理に同じく、水分を帯び膨張して漏水を防ぐ。しかし長期使用すれば漏水は必至である。桶 oke の場合でも酒の升 masu の場合でも経験する。船はまきはだ makihada と呼ばれる漏水防止用の木の皮を打ち込みながら、航海を続けた。洋上補修・小修理が必要とされた。漏水に加えて、雨水や風浪波は必ず船内に貯まる。アカ aka と呼ばれたこの水は航海中にたえず船外へ排出し続けなければならない。停泊地では修理などに十日程度の停泊が必要とされたと考えられ、津や島の役割は大きかった。

なおこうした河川内港湾・干潟港湾の発達には日本海を航行した船がじっさいには船底の浅い船（準構造船）であった可能性を示唆する。もし河川に入れない竜骨船（構造船）であったならば、風浪を避けうる場所がないからである。また船を腐食する虫、動物類が淡水域では生息できないといわれていることも、河川港湾発達の背景にあらう。

博多内海 Uchiumi ・発達した砂丘後背干潟と唐房

(1) 今津

今津 Imadsu・今宿 Imajuku 砂丘の場合、七寺 Nanadera 川は現在の河口を持たず、瑞梅寺 Zuibaiji 川河口干潟まで砂丘後背を流れて行って瑞梅寺川といっしょになって海に出る。ここに今津の港があった。今津には中国人僧・蘭溪道隆の開基になる勝福寺があり、且過 Tangwa 遺跡のような中国陶磁器を出土した遺跡もある。唐房地名はないが、中国人居留地があっただろう。

(2) 姪浜

姪浜 Mei-no-hama の場合、十郎 Jurou 川に現在の河口はなく、名柄 Nagara 川といっしょになって、下山門 Shimoyamato の河口干潟を形成し、その後、海に出た。河口には姪浜があり、チャイナタウン Chinatown を意味するトウボウ（唐房 Toubou, いまは当方と表記する。Chinese Settlements）地名があった。海図には名柄川が当方川と書かれている。その内陸側、名柄川（当方川）の旧干潟にはイマトウボウ Imatoubou という地名が残り、越州窯青磁が大量に出土する遺跡がある。今唐房（いまは稲当方、または今東方と表記する）すなわちニューチャイナタウン New Chinese Settlements を意味する地名がある。姪浜には室見川旧流路が合流していた可能性も考えられる。

(3) 鳥飼

樋井 Hii 川は鳥飼 Torikai 干潟（現在の太濠 Ohori 公園の前身）を形成した後、荒戸 Arato の海に出た。現河口は近世の新開川（今川）である。旧河口・鳥飼に宋人・博多「綱首張英号鳥飼二郎船頭」（建長五・1253）がいた。『蒙古襲来絵詞』にも「とりかひのしほひかた」（鳥飼潮干潟）が登場している。「塩屋の松」のあったこと、つまり塩屋の存在もわかる。鳥飼潮干潟に隣接する田島 Tashima には「当宮（筥崎 Hakozaki 宮）領田嶋村内塩浜四町」とあって、広大な塩浜 Shiohama すなわち塩入干潟 Shioiri-higata があった（文正二年（1467）四月五日・興隆寺文書）。

(4) 博多津

石堂 Ishidou 川（御笠 Mikasa 川）も独自の河口をもてず、砂丘後背を迂回し、住吉 Sumiyoshi 神社前干潟を経由して那珂 Naka 川に合流し、河口に出た。むろん干潟に面して博多津があり、博多津唐房があった。「博多津唐房」は永久四（1116）年の西教寺経巻奥書に、また仁安三年（1168）の栄西の入宋縁起に登場する。

(5) 箱崎津

多々良 Tatara 川・宇美 Umi 川河口はいまも一つとなって海に出る。この干潟

には箱崎津があったと考えられ、宋人御皆免田など宋人に与えられた免田やかれらの居留地があった。宋人王昇後家追捕の記事に「押混筥崎博多，乱入当官」（仁平元年 1151）とあり，宋人居住地のあったことがわかる。干潟に面しては越州窯青磁の優品を多く出土した多々良込田遺跡がある。

こうした干潟に大型船は入れないが，底の平らなヒラダ船は潮汐を利用して楽に入ることができた。そうした地域，荷の積み揚げ地に，大小の宋人街が形成されたと考える。

(6) 唐津・松浦・津屋崎のトウボウ

玄界灘，肥前 Hizen 海岸にもトウボウ地名が残る。唐津 Karatsu 市唐房は遣唐使船が立ち寄った唐津湾口・神集島（Kashiwajima）の対岸であるし，松浦市大崎 Ousaki 東防 Toubou 近く，楼階田遺跡からは「綱司」（中国船船頭）銘墨書土器が出土している。宗像郡津屋崎 Tsuyazaki の唐防地は中国陶磁器を多く出土し，いま遺跡のある小学校に唐坊跡展示館が作られている。『教訓抄』によれば，永長二年（1097）以前に「ハナカタ Hanakata 唐坊」が存在していたが，ハ・Ha・ム Mu は字体が似る。宗像 Munakata 郡津屋崎を指そう。ここから小呂島に到った。

このように唐房地名が多数残存する。ほか文献上平戸 Hirado 蘇船頭らの存在もわかる。有明 Ariake 海や薩摩西南海岸にも唐房地名は多かった。有明海の場合は，各地荘園（肥前杵嶋 Kishima 庄，神崎 Kanzaki 庄など）に唐船着岸の記録がある。南側からの大宰府ルート（肥前・肥後 Higo・筑後 Chikugo の三国府 Kokuhu ルートを含む）をめざす途上の津泊（口ノ津 Kuchi-no-tsu，長崎矢上 Nagasaki Yagami）にはやはり唐房地名が残る。大小の中国語社会・中国人社会が必要とされ，そこに利権もあった。津泊での修理にも中国人とその技術が必要だった。唐房が各地に発生する理由は，ひとつには利権の「独占から分散へ」という構図にあり，ひとつにはみえてきたような分業（修理・造船・運輸）であろう。知の完全掌握は，日中交易に携わる貿易商人にはいまだ不可能であった。知の体系は地域知であって，島々やそれぞれの津泊に部分的に蓄積されていた。

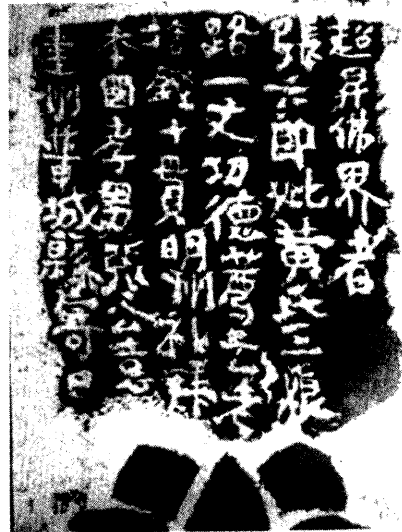
3. 在日宋人の活動 — 一世の場合と三世・四世の場合

寧波寄進碑

貿易に関与し、豊富な財力を持つ中国人とその末裔は、多くの遺物・遺品を残した。太宰府在住の宋人張公意、張寧、丁淵が寄進した中国・寧波所在の乾道三年（1167、日本仁安二年）の三碑（天一閣博物館蔵）はあまりに著名である。高倉洋彰氏が紹介し、福岡市博物館「チャイナタウン展」（平成15年）図録に収録された拓本（A）のほかにも別の拓本（B）があつて、チャイナタウン展・開期中には図録（A）とは別の拓本（B）が展示されていた（図録の拓本（A）は蓮弁部分、碑面を塗りつぶしている。碑に研磨はなく細かな凹凸があるのに、それが反映されていない。拓本をもとに加筆修正したものか）。

- (1) 日本国太宰府博多津居住弟子丁淵、捨身十貫文砌路一丈功德、奉獻三界諸天、十方智聖、本宅上代、本命星官見生眷属四惣法界衆生同生仏果者 乾道三年四月日
- (2) 日本国太宰府居住弟子張寧、捨身砌路一丈功德、奉獻三界諸天、宅神香火、上代先亡、本命元辰、一切神祇等 乾道三年四月
- (3) (左から右へ)

超昇仏界者
張六郎妣黃氏三娘
路一丈功德薦亡孝
捨錢十貫、明州礼拝
本国孝男張公意
建州普城县寄日



このうち張公意寄進碑はこれまでの研究では第三碑とされていたものである。しかし建立の趣旨・経緯からいえば第一碑というべきものか。また張公意はこれまで張公意と読まれてきた。図録拓本では「立」の部分で明確で「意」と読める。図録

張公意寄進碑（高倉論文より）

140 頁の釈文でも張公意と読まれている。しかしメモによると、展示されていた方の拓本(B)では、張公意(または志)のように読めたようで、心の上は日よりは口に近い。

張公意碑は他の二碑と異なって、左行から右行に書かれている。漢字としては異例であって、「逆」が強調される。寄進者・製作者・読者間にあった暗黙了解をあえて読み取るならば、この「逆」は冥界を強く意識したものではないか。

*大分県立歴史博物館所蔵・妙勝寺開山愚直師侷頂相に左から右に書いた賛がある。

その場合、だれが故人であったのかについては、いくつもの可能性が考えられるが、ここでは冥界にいる亡き母への思慕の表記と考えたい。母を通じての母国・宋へのアイデンティティ Identity が濃厚にあった。張公意の父は張六郎(六は元、郎は師かもしれない)であった。張六郎なる読みが正しければ、かれは実名を持たぬ庶民層であった。また母は、黄三娘であって、中国姓である。女性性は家庭・家族を守るから、大航海はしないだろう。その前提に立てば、おそらく黄三娘は中国で生涯を終えた女性である。張公意は中国への帰属意識をつよく持つ一世であった。それゆえに本貫地を「建州普城県」とした。他の二名が「太宰府居住」であって、宋籍を強調しなかったこと、つまり二世の可能性を持つこととは異なっている。寄進をした寺(礼拝所)は彼の幼年時と、そして母への思い出が強く残る寺であった。張グループは公意母への思いゆえに一人が十貫文、計三十貫文という額の寄進をした(張寧分には寄進額についての記載がないものの、砌路1丈を寄進したことは共通する。銭以外のものを寄進した可能性はあるが、ほぼ同額の寄進であった)。

顧文璧・林士民「寧波現存日本国太宰府博多津華僑刻石之研究」『文物』(1985年 第7期)や森本朝子「博多宋人に関する新資料」(『文明のクロスロード Museum Kyushu』19, 1986)ではこの「水夫」の財力に関する検討がなされていて、とくに前者では「而財力都很低」と、この額を低額とみる見解が強調されている。張公意はまずしい階層の水夫で、わずかな額を寄進したというのである。ワークショップ当日、また「交流と変容」研究会(1月27日)でもそうした意見が出た。中国では今も旅行者に寄付を求め、記念に名を碑に刻す慣習があるという。だが後進国日本では一般個人の名が碑文に登場するまでには、なお4,500年もの時間を必要とした。現代の事例を一気に1000年遡らせることは危険

である。また父母の冥福を祈る文言や、左から右に書く特殊な書き方も類型化・規格化したものとみる判断を許さない。勸進では広く零細な寄付を求める一方、富める者には高額寄付を要請するのが通例である。以下にくわしく検討したい。

寄進碑は粗末な印象を与える。低額なる評価はまずそのことに由来する。しかし寄進の目的は碑を作ることにあったわけではない。寺の門前に砌路（石で舗装された参道、みぎりみち）を作る工事（1丈分）に対して寄進したのである。完成した砌1丈（計3丈であろう）が、立派であるかどうかによって、寄進額の多寡を論じるべきではないか。寄進は神仏に対してなされる。碑を作って寄進者の名前を残さなければならないというわけではない。祭礼などでよくみかける光景は、寄進者の名前・金額を紙に書き、その場に披露するものだ。しかし永久保存はされない。木札に書かれる場合もある。そこではいくぶん長期の保存が意識される（日本の事例は水藤真『絵画・木札・石造物に中世を読む』）。それでも石にはかなわない。石に刻むことは破格である。

十貫文は日本では米十石を購入できる金額である。中国の場合、斯波義信『宋代経済史の研究』（163頁）によれば、理宗淳和二年（1242）のころの江浙の米価は一升二〇～三〇文であった。この数値は全漢昇氏が十二世紀後半から十三世紀初めはおおむね一斗二〇〇～三〇〇文であったとする見解（1943～48）に同じである。これに対しては一升三〇～六〇文とみるべきだとする何忠礼氏の異説があるものの（以上は宮澤知之『宋代中国の国家と経済』創文社・所収「宋代の価格と市場」1998）、衣川強「宋代の官僚と俸給」（『東方學報』京都・42、1971）には該当期、すなわち乾道三年（1167）前後の詳細なデータが文脈とともに提示されており、この時期に関しては一升二〇文であると判断できる。すなわち前後する隆興元年（1163）から乾道七年（1171）にかけて10例の記述があり、その平均米価は1升22.0文である。乾道二年の例では豊作のため米一升十五乃至十六銭（文）となったが、安すぎて農民が苦しんでいる、凶作気味で米一升二五乃至二六銭となったが社会不安には至っていない、大雨に苦しむ民を救うため、一升二〇文省（一五文であろう）の値段で官有米を放出すべきである、とある。なお季節差もあり、七月から九月の事例が高く二〇から五〇文であるが、二月の事例では十五省（一二文）から三〇文である。

したがって乾道三年（1167）四月当時、1升は二〇文、1斗は二〇〇文であっ

て、一貫では5斗だから、錢一〇貫文は江浙では米5石を買うことのできる金額であったと結論できた。さきの衣川論文には南宋では一日1升の米を食べ、兵卒の場合には2升を食べたとある(184頁)。1年に3石6斗5升であろうから、5石は一年半近く食べられる米である。

日中間には度量衡の差異がある。呉承洛『中国度量衡史』(中華民国二六年・1937, 71頁)に

一升合公撮数	宋	664.1
一升合公升数	宋	0.6641

とある。中国の市制の升は公升(リットル)に同じだから、日本の1升は1.804公升(リットル)になる。現代中国の1升は日本升(ほぼ京升到同じ)の5合5勺4撮である(『岩波中国語辞典』によれば公升(リットル)は旧制の升0.966に該当する)。小泉袈裟勝『単位の歴史辞典』に「今の(*日本升)三合六勺九撮」に相当とあるのは $664 \div 1.8$ であろう。『漢語大詞典』附録・索引「中国歴代量制演變測算簡表」(12頁)は1950年遼寧義県出土遼寧崇徳宮銅量(上部1047, 下部500)というデータを加えたもので、宋升は1升=670mlとある。今の日本升の3合7勺2撮となろう。宋代の1升は唐の1升到同じで日本京升の4合に当たるといえるが、厳密にはさらに小さい。

いっぽう日本・平安時代の升については当時主流だったと思われる本升・国升で換算すべきだが、大きさがわからないので、宣旨升と比較する。宣旨升については四種もの異なる大きさを記す史料があって、そのこと自体、宣旨升の大きさの変化を語る。最も小さな数値を記し、平安期宣旨升の数値と推定される「伊呂波字類抄」の記載によれば、京升の六割、6合3勺である(以上は宝月圭吾『中世量制史の研究』による。『単位の歴史辞典』は宝月著書が史料的価値を低いとした「潤背」に依拠して今の4合5勺とし、復古升とする。本升はより大きかったか。「伊呂波字類抄」への言及はない)。よっておおまかな目安でいえば、中国と日本の升の容量には1対1.7ほどの差異があった。

再度衣川論文が指摘した一日に食べる米の量で比較する。日本では一人一日三合食べるとみたい。近世の侍には一日五合が支給された。先の例と比較すると、京升は宋升の3~4倍の大きさだった。宣旨升を京升の6割と見れば、1対1.8ないし2.4となつて、さきの換算1対1.7よりも差が開く。

江浙では一〇貫文あれば一人が一年半食べることのできる米を買うことができた。この額こそが砌路・1丈すなわち石舗装の参道・10尺分(3メートル弱)の建設費に相当した。この額を「都很低」とみる研究史は報告者には理解できない。礼拝堂は砌路建設に当たり、異国日本に住む郷里出身海外商人(いまでいう華僑)の信徒に寄附を求めてきたのである。

この碑についての論考に伊原弘「宋代の道路建設と寄進額」(『日本歴史』626, 2000), 同「宋代社会と銭」(『アジア遊学』18, 2000)がある。伊原氏は蘇州の街路舗装に拠金した五十三人のうち、最高額は三十貫文(張ファミリーの合計と同額)で、十貫を拠出したものは上位から七番目であったこと、四十数名は一から二貫程度で米や瓦や磚の寄進者もいたことを指摘している(『世界の歴史 宋と中央ユーラシア』158頁)。また最低位の官僚・地方官の一月の給与が七貫文だったこと、当時都市で働くものの賃金が一日一五〇~三〇〇文、田舎で働くものが三〇文足らずであったとする例も挙げながら、この十貫文がけっして少ない額ではなかったと論証している。私見を十分に補強してくれるだろう。遠く海の彼方、異国・日本より、かくも多大な額を寄進した仏弟子・信徒がいた。寺からしてみれば、大いに宣伝価値があった。特別に石に刻んで広く示し、永久に残した。寺の力の誇示に大きな意味があった。

日本中世の場合、米一石が銭一貫に相当していた。需要供給の逆転などに配慮しつつ、今の貨幣価値に換算してみた私案では中世後期の一貫は15万円、平安期ならば9万円ぐらいである。米価・升の大きさが異なる宋において、一貫は江浙ならば3万円ぐらいになろうか。三人合わせた三〇貫は100万円弱相当の寄進とみたい。

銅銭の国際格差と輸入原動力

国際レート of 明示された今日でも、発展途上国を旅行すると貨幣価値の格差を感じる。当時には、より極端な価格差があった。あえて作ったものさしには不確定要素が多いが、ものさしがなければ比較はできないし、現実感覚も、もてない。上記換算を目安とすれば、日本の貨幣価値と中国の貨幣価値は同じ銅銭であっても、3~4倍(米価で2倍、度量衡で1.5~2倍)の格差があった。

なお省陌・短陌の問題があって、中国・公用では緡は77枚で100文となり、

日本中世ではいっばんに 97 枚で 100 文となった（井上泰也「宋代貨幣システムの継ぎ目」『アジア遊学』18, 2000, 宮沢知之「唐宋時代の短陌と貨幣経済の特色」（前掲書所収）, 石井進「錢百文は何枚か」『石井進著作集』10）。すると 3～4 倍は 2.4～3.2 倍となる可能性もある。ところが『參天台五台山記』を読んでみると、草鞋一足直八十文（日本延久四年・宋熙寧五年・一〇七二年四月十七日条）、夫十三人酒料錢九十八文（五月十一日条）、沐浴八人料錢八十文（四月二十一日条）などとみえて、七十七文以上の使用例がみられるから、七十七進法である省陌七十七文が行われていたとは考えられない。公用のみが七十七文で、民間では足陌も主流で、省七十七文・百文ではなかった。日本中世に大きさの異なる収納升と下行升があったように、そして中国金匁に官估と市匁があったように、宋では公用に適用される省陌七十七文と民間で主流の足陌があった。おそらく省七十七は精錢であることを前提とし、足陌は私鑄錢・悪錢を含むことを前提にしていたのであろう。しかし明らかに二重価格であったから、省陌七十七文は国際格差を考える場合に当面捨象できる。

中国では日本より少ない量の米に、日本より多量の銅貨を支払って購入した。宋錢は宋では価値が低く、日本では高かった。この格差による利潤こそが宋錢輸入の原動力だった。新安沖沈没船に積まれた 28 トンの銅錢はわれわれを驚かせるが、日本に無事到着すればそれは一気に 3～4 倍の利益をもたらした。

錢が大量に入って、物が出て行けばインフレになる。『百鍊抄』治承三年(1179)六月条に「近日、天下上下病悩、号之錢病」とみえる「錢の病」こそ、インフレによる疲弊であろう。翌月の『玉葉』七月二十七日条に「近代渡唐土之錢、於此朝恣売買云々」とみえ、その停止が提案された。文治三年(1187)、また建久四年(1193)に宋錢停止令が出されたことが『玉葉』『仲資王記』『法曹至要抄』にみえ、檢非違使が七条西市に赴いて、国営市場での宋錢取引を禁じている。しかし実際にはさして効力がなかったことは周知のことである。『百鍊抄』寛喜二年(1230)六月二十四日条に「以錢一貫文、可被直米一石之由、被下宣旨」とあるように、公出挙における一貫一石の原則も大きく揺らぎ、対策が迫られた。宋の側でも「錢荒」（錢飢饉）となった（以上は池享編『錢貨』など）。かくも格差があれば、流出は防げない。

日宋間で銅銭流出現象のおこる理由を、具体的に国際価格差から説明した研究は、神木哲男「中世における貨幣使用—日本中世貨幣史の構成に際して」『国民経済雑誌』152-5 (1981) があり、金1両が中国1209・1216年に18,000文であったこと(加藤繁「唐宋時代における金銀の研究」東洋文庫1926, 473頁)に対し、日本では1156年に金1両=米3石すなわち3,000文であったから6倍の格差があったとされている。『権記』長保二年(1000)の例では、宋商側が砂金両別米三石を主張したのに対し、太宰府は米一石を主張し、けっきょく二石で売買された。一五〇年差はあるが、三石はかなり高めであって、差はさらに開くかもしれない。金での換算にはなお考察の余地がある。しかし具体的な両国間価値差を検討した唯一の報告として参考になる。

研究論文こそ少ないが、しかし同時代人の証言があることに注目したい。曾我部静雄『日宋金貨幣交流史』167-8頁、あるいは斯波義信「港市論」(『アジアのなかの日本史』3・17頁)ほか引用する南宋広東転運判官(東南海岸密貿易取り締まり担当官)・包恢の『敝箒叢略』(静嘉堂文庫ほか蔵)には

100名も乗せる倭船が、毎年40～50隻も板木、螺頭(螺鈿材料)、硫黄を積んで明州に入り、もっぱら禁制である銅銭に換えて帰る。市舶官空検(臨検)を受けるべきところ、あらかじめ船底に隠し、知り合いの船や小港に貯え、臨検のあとで集める。

と述べたあと、南海に関して

一船にて数万貫文を載せて去る可く、つねにこれ^(十カ)一貫の数にて以て番貨百貫の物に易ふ可く、百貫の数は以て番貨千貫の物に易ふ可し

と記す。東南アジアでは銅銭1相当でその10倍相当の番貨(蛮貨)が買えたとある。番貨は基本は銅銭(宋銭)だが、おそらくは宋よりの私鑄銭や現地諸国での私鑄銭が含まれていた。主体は銅銭だが、悪貨であった。対日本の格差3～4倍は、対東南アジアよりみただの利益率は悪いが、

倭船は多く珍奇を有ち、凡て値一百貫文のものはただ十貫文にてこれを得べく、凡て値千貫文のものはただ百貫文にてこれを得べし。

とあるように、日本からの輸出品での利が東南アジアのそれに伍した。

東野治之『貨幣の日本史』74頁に「北宋銭の鑄造は毎年600万貫(60億枚)」とある。新安沈船の銅銭は小銭^{しょうせん}換算で800万枚となる。包恢の証言のように50

艘がこれを運んだとしたら四億枚になる。仁治三年（1242）の西園寺船は錢一〇万貫（1億枚）を運んだ（『故一品記』）。ほかにも類似の船はあっただろう。宋国鑄造銅錢の5%以上が日本へ運ばれたと考える。

李太子と博多通事・李一族

交易の増大によって、もののみならず、たえず大陸から宋人が来訪し、そして日本に定着した。とすれば在日宋人は増大し続けたことになるが、実際には双方に拠点を持って行き来する宋人は少なかったのではないかと。当時、家庭・家族をもつ女性は航海しなかったと考えた。宋と日本の双方にそれぞれ家庭を持つ男性は当然いたであろうが、日本の家庭には日本人妻がいたと考えるのが妥当であろう。在日二世の男子はまた日本人女性と結婚し、女子は日本人男性と結婚することが多かった。日本人の有力者は富裕な宋人と婚姻し、縁戚になることを強く望んだ。宗像大宮司家に嫁いだ王氏、張氏の例も知られる。

そこでつぎに福岡市西区今宿出土（付箋に「福岡県糸島郡今宿村今宿」）とされる経筒と、その銘にみえる李太子を検討しよう（出光美術館蔵、関秀夫編『経塚遺文』所収、『平安遺文』金石文編未収録）。

（筒身）（墨書）

為 尼妙経 尊霊往生施入

保延二年十月廿一日乙卯李太子之

（最上段筒身内側）（墨書）

李太子為勝母尼妙経為往生施入如右

保延二（1136）年に李太子なる女性が登場している。李一族については

- 1 仁安三年（1168）に「兩朝通事李徳昭」（『興禅護国論』），
- 2 文治四年（1188）から建久六（1195）にかけての『宗像一切経』に墨檀越李榮，
- 3 建久の頃（五年・1194）『日吉山王利生記』に博多津前通事李宇

が登場する。李太子は30年前、50年前に活動した。かれらの一代、二世代前にあたる人である。父は宋人李であるが、母尼妙経は日本人かもしれない。経塚造営の主体となったように、豊富な資産力があった。一族か、もしかすれ

ば子孫と推定される李徳昭は、兩朝通事、李宇は博多津前通事とあって、いずれも通事（通詞・通訳）である。前通事とあるから、定員があつて、補任される職であつた。李は代々「博多津通事」職に補任される有力一家であつた。

李太子については「太子」という名乗りが注目できる。いかにも日本風名乗りだからである。『平安遺文』に散見されるように

女檀那仲原氏太子（治承二年・1178・七月十五日）

坂上太子（裏に）僧上実妻（寿永元年・1182・六月十五日）

是貞門之生母伴氏太子（寿永二年・1183・十二月十五日）

とあって、女性は太子と名乗った。保延七年（1141）の豊後高田市加礼川出土の銅箱では

太中臣六子・太中臣中子・太中臣大子

とある。それぞれが区別されている。大姫・乙姫といった呼称から考えると「太子」は長女を指そう。中国人の場合は「太娘」となる。さきの博多津在住者による寧波寄進碑には黄氏「三娘」とあつた。京都清凉寺釈迦堂本尊は唐より将来されたもので、胎内文書には

王仁朗 周文翌 林五娘 施大娘 謝舅兒 鄭佰婦高鄭姑 高三

高三娘 杜太娘 応玄靖 徐大娘 高四娘袁遂 顧承備（略）

雍熙二年八月十八日匠人張延皎 ---（略）-- 開元寺僧居信

とある（雍熙二年は日本・寛和二年に相当、985年）。

日本製経筒であつて、日本人が銘文を書いたわけだから「太子」表記になったことも考え得る。しかしそうではなく、すでにこの段階で事実上、日本人化していたのではなからうか。

通事は中国人（宋人）であると同時に、半分は日本人であることが理想であろう。通訳の家はいつまでも中国姓を名乗り続けたと考えられる。

景泰五年（1454、日本享徳三）天竜寺船の

一号船（門司和泉丸）には柴通事、沈通事、船頭門司五郎左衛門

二号船（門司宮丸）には薛通事、張通事、船頭次郎左衛門

三号船（門司寺丸）には林通事、阮通事 船頭大蔵左衛門

が乗員にいた（『策彦入明記』上、356頁）。かれらは日本と中国を行き来した。

この和泉丸ほかは日本製であろう。船頭も日本人ばかりである。しかし通事は全員中国人である。じっさいには在日宋人の何世代もの後裔か。実態は中国語のできる日本人というべきであろう。通事としての正当性を示すものが姓・苗字で、商標でもあった。

鹿児島県加世田市の媽姐 Maso 像所有者は林姓であった。長（張）、薛、林、龍・笠（劉か）など中国苗字の日本人は今でも多い。伝承が残る場合、先祖は儒学者や、御典医であったりして、なんらかの技術者であるように思われる。

4. 唐房の消滅

唐房は地名史料としては現代まで伝わっている。鎌倉後期、入来院文書・永仁三年（1295）武光師兼配分状（『鎌倉遺文』251-18927）の用例は「蒔崎唐坊園」であって、宋人街を意味するものか、地名化しているものかは未詳である。宋人街を意味する唐房の文献上の用例は上述のように、平安時代までである。博多周辺宋人の活躍は建長五年（1253）張興・張英や文応二年（1261）油山梵鐘の故鄭三綱真まで、すなわち蒙古襲来前までは文献によって確認できる。彼らの居住区は依然として中国人居住区として唐房と呼ばれつづけていたであろう。

蒙古襲来・戦間の交易

従来、日元貿易の衰退と唐房の消滅は蒙古襲来によるものとされてきた。「チャイナタウン展」においてもそうした解説がなされていた。しかし戦争が小康状態になれば商人は直ちにやってくる。

宋とは友好関係にあったから、文永の役（文永十一年・1274）の直後でもその滅亡までは交易船の往来が続く。建治三年（1277）から弘安二年（1279）にかけての宋船記事や渡宋僧、宋人僧の帰国・入国記事がある（以下は森克己『日宋貿易の研究』511頁以下、同『続々日宋貿易の研究』83頁以下「日元交渉」）。

ところが元とも同じ時期に交易があって、『元史』によれば建治三年（1277）、日本商人が黄金を持して元に赴き、銅銭と易えた。至元十五・弘安元年（1278）十一月、元は沿海官司に詔諭して日本商船の貿易を許した。詔諭には「商人を困めずに柔遠に道を尽せ」とあった（『国朝（元）文類』）。翌十六年、日本商

船四艘が慶元に入港、交易を許された。交戦期間の通商である。

記録に残るものだけでも多い。危険（戦争）を恐れず利益を追求する商人の行動をよく示す。当時、戦争は軍・兵だけのもので、また局地限定戦であった。元が敵国であるという意識はどこまであったのだろうか。

弘安の役から十年が経過した正応五年（1292）、六月には日本商船四艘が元に赴き難破し、一艘のみが慶元に達して交易した。十月、日本商船が慶元に赴き、互市を求めた。これらは『元史』に記された事例である。この背景には多くの交易船の往来があった。嘉元三年（1305）に日本船が慶元に至り、僧龍山徳見が入元したこと、あるいは徳治二年（1307）雪村友梅の入元などは、日本側の史料（『真源大照禪師竜山和尚行状』『雪村大和尚行道記』）のみに見えて、『元史』に記述はない。日本側の記述も偶然であり、帰国できなかった僧侶や、トップの地位につけず高僧伝を残せなかった僧侶の記録はない。新安沖で沈没した船の記事も、また包恢『敝箒藁略』の多数船舶の記事も残らなかった。『元史』や『高僧伝』の背後に多くの日元交易があった。交易は継続されたが、やがてチャイナタウンとしての唐房は消滅していく。それは航海に関わる主体が中国人社会から日本人社会に移行したことを背景にしていた。

日本人主導による航海へ

平安期（10～11世紀）には、造船・航海術は中国人が独占的に掌握した。しかし遠洋航海には津々浦々の知の体系の把握が必要だった。入港には精通する水先案内人 pilot の同乗が必要だった。天候・風向きに通じ、水深・海底地形に関する知の体系把握が必要とされた。島や津泊の役割は重要で、主要な津泊に唐房（宋人街）が存在した。津泊ごとに船の修理（小修理・大修理）も必要で、一定日数の停泊を必要としたから、中国語の通じる世界が必要だった。航海技術も修理技術も中国人のものだったからである。それら技術はやがて日本人化した中国人へ、そして日本人のものに移行していく。

永正年間（1504～）、通事銭六官宗貞の子、銭宗璃の場合、通事の子で中国苗字であっても明の言葉を知らなかった（小葉田淳『中世日支通交貿易史の研究』108頁）。そのような事態は以前からのものであろう。鎌倉後期には筑州において唐船が建造されている（金沢文庫文書・頼照書状、『神奈川県史』資料

編 2-1981 号)。造船に適した巨大な木材入手は日本の方が容易で、木流しが可能な大河々口に造船所があっただろう。唐船は日本製となり、乗員にも日本人が増加していった。中国社会に依拠していた日中貿易は日本人の手によって可能になっていった。そうした動向につれて、中国語社会の存在理由は薄れていく。唐房の住民は日本人化し、中国人社会とは認識されなくなって地名のみになった。

かの明書『武備志』も

有一街名大唐街，唐人留彼相伝今盡為倭也

と記述する。博多・箱崎大唐街に幾世代にもわたり住み続けてきた唐人たちが、いまは倭人に同化していた。宋人居留地としての唐房は、半ば消滅し、地名のみとなっていた。それは在日宋人の末裔が、中国姓を名乗りはするものの、実質的には日本人であったことと軌を一にするものだった。

* 関係資料集

福岡市博物館『チャイナタウン展』，2003

林文理「「博多綱首」関係史料」（『福岡市博物館研究紀要』4，1994）

高倉洋彰「寧波市現存の太宰府博多津宋人刻石について」（『福岡市の古環境と遺跡立地』，1998）

小田富士雄「出光美術館所蔵の九州発見経筒」（『出光美術館報』32，1980）

『旧唐書倭国日本伝・宋史日本伝・元史日本伝—中国正史日本伝（2）』，1956

* ワークショップ当日はほかにも在日宋人に関する史料（色定一切経・宋風狛犬<獅子>など）を用意し提示したが、時間の関係で多くは言及できなかった。本報告でふれられなかった諸論点については別の機会に委ねたい。種々御教示くださった COE メンバーほか多くの方々に感謝したい。